



静脩

1992年6月

Vol. 29, No 1

The Kyoto University Library Bulletin

館長サナギの見習い日記

附属図書館長

朝 尾 直 弘

はからずも、この4月から西田龍雄教授退官のあとをうけ、附属図書館長の職をけがすはめにおちいりました。

大学図書館の仕事については、その重要性は認識しているものの、日常の具体的な業務はなにひとつ知らないのが現状で、目下のところ毎日のスケジュールの消化をとおして見習い中というのが実情です。以下、それらのうちの二、三について多少の感想をまじえながら報告いたします。素人くさくてどうかと思いましたが、多くの方も同様ではないかと、あえて書いてみました。

1) 土曜日開館問題

就任早々ぶつかったのは、国家公務員の完全週休2日制実施への対応でした。この問題に対する各部局のご意向はすでに昨年暮れの商議会で明らかにされており、私も商議員の一人として承知しておりましたが、そのときは実施は九月からと予想されていました。国際的な労働時間短縮の趨勢に立ち遅れないため、政府が異例の五月繰り上げ実施を号令して、あわただしく対応策を講じることになった事情はご存じのとおりです。

京都大学の蔵書数は現在500万冊を超え、年間の入館者数は2年前の統計で64万人以上に及んでいます。しかし、数字は大きいが見合うだけの内実のあるサービスがなされているかという、疑問も多いのです。世界の第一線で研究に

のぎを削っている研究者や、その後をつぐべき学生の要求にこたえ、それらをささえ押し上げていくのが一流の大学図書館の任務であると思いますが、現状はそれにほど遠い部分をかかえています。そのひとつが開館時間の問題です。

欧米の名の知れた大学図書館は24時間開館も珍しくなく、午後10時までの開館はふつうといってもよいでしょう。それでかれらは週休2日の休みはちゃんととって、ゆうゆうと仕事をしています。社会全体がそういうシステムで動いているから可能なのですが、民間の時短不足を公務員の時短で埋め合わせようという国では、システムがきしみを起こし、なかなか機能しないのが泣き所です。公務員は土日出勤してはならないときめてくださったのは有難いことですが、近年、民間研究所に対する大学の地位低下がしきりに指摘される折から、ほうっておくと土日休業する国立大学の地位は、いよいよ下落するおそれなしとします。そのうち風向きが変わって、大学は休んでばかりいるから研究能力が落ちるのだ、などといわれないう、せめて、いま提供しているサービスの程度を落とさないくらいは心がけるべきでしょう。

附属図書館は、各部局図書館と中央図書館とで構成されています。両者の連携がうまくとれ、円滑に動いていてこそ、総合大学の持味が発揮できるものと思います。上記の蔵書冊数も、中央だけ

ですと75万冊にしかならず、もてる力を全面的に発揮するにはいたらないかもしれません。そうはいっても、各部局が予算や人、その他多くの問題をかかえ、部局の図書館を開館する余裕がないとすれば、大学としては、相当の無理をしてでも中央図書館を開館する必要があります。商議会の議論もその方向を向いていました。さいわい、総長をはじめ大学当局のご理解を得ることができ、五月第2土曜から、土曜開館を実施しています。いろいろな制約があって、不便をおかけしていますが、いまのところ平均1000～1200人の入館者があり、関係者はみな「開けてよかった」と一様に安堵しています。外から観れば、「なんだこれぼっち」と思われるかも知れませんが、突発的な繰り上げ実施で苦勞し、献身的に働いている人たちのいることを、ときどき思い出してくださると幸いです。

先日、国立大学図書館協議会の理事会があり、全国の大学がそれぞれ苦心しておられる状況をつぶさに知ることができました。関係当局の対応も進んできており、安定した土曜開館ができるのも遠くないことと思われます。まず、それが確保されたうえで、文字どおり世界のなかの京都大学にふさわしい、さらに踏みこんだサービスができるよう努力したいと思っています。

2) 学内LANの基盤整備

文学部出身の私には、コンピュータはブラックボックスのようなもので、いまだに理解を超越していますが、便利な結果だけは頂戴したいというのが正直な気分です。

館長になって気が付いたのは、図書館のコンピュータ利用がいちじるしく理工系に偏って発達していることです。あるいは理工系のなかでも一部に偏っているのかどうか、その辺りはまだよくわかりません。これは京大に限らず、日本全体がそういう状況にあるといえそうです。人文系や社会系でも、ごく一部にはひどく進んだところがあるのかも知れません。

この中央図書館において、理工系のある分野では、コンピュータを通じて海外の最新の雑誌や速報の情報を即座に得ることができます。一刻一秒

を争う発見や発明の競争にとって、それはたしかに欠くことのできない道具になっています。しかし、それほど急がない人文系でも利用の範囲は広いように思えます。海外の古典的文献や最新の研究で日本では入手不可能なもの、入手困難なものは沢山あり、ある種の分野では、そのために博士課程の教育研究に支障をきたしているところも、すくなくあります。これをコンピュータの画面に引き出すことができれば、どんなに便利なことでしょう。

京大には、KUINSという国内随一の学内LANがあって、国際的な情報ネットワークの一環に結ばれ、いわば受け入れの場はできています。しかし、それを活用するシステムの基盤整備は、人文系に関してはひどく遅れているのが実情のようです。ことはそれほど単純ではありませんが、人文・自然を問わず、学術情報利用の観点から、今後なんとかしたい問題ではあります。

この問題には、まだ乗り越えなければならない課題に、著作権問題があります。これが解決しないと、理工系の利用も現在の制限されたままでいるしかありません。企業などとは異なって大学における著作の利用をどのように位置付けるか、目下、関係者の協議がつづいています。附属図書館はそれに積極的に意見を述べる立場にたっています。社会において大学のはたすべき役割と地位が、そういった視角からも問われているということができます。

3) 保存図書館

国立大学図書館協議会では、保存図書館（Deposit Library）を地域ごとに新設するよう要望をだしています。図書は年々増加する宿命にあります。自然科学の雑誌などのように、古くなったら廃棄できるものはともかく、人文・社会科学を中心とする分野では、図書の学術的生命が長く、資料としての価値も高いものが多いのです。10年に1度しか利用されない本でも図書館は提供する義務があります。かといって、書庫をあふれるままにしておくことはできません。保存図書館は比較的利用頻度の低い図書を格納しておき、請求のあったときに貸出すものです。

なんでも欧米を持ち出したいわけではありませんが、私は博物館を作るとき図書館もかなり観て回りました。とくに、アメリカの主要な大学では、学生図書館のほかに保存図書館と稀観本・写本図書館（Rare Book and Manuscript Library）をあわせもち、統合運用がなされていたことが印象に残っています。本学の場合、貴重本の書庫はよく整備されていて、古文書・古記録をふくめ稀観本の保存環境は良好に保たれています。ただ、私の専門分野に近いので少し余計なことをいえば、ハードはよいがソフトはまだまだ。虫食いや湿気の入った貴重本を修理して利用できるようにするための費用はわずかで、恒常的には保証されていないのです。また、東大のように大震災を被らなかつたおかげで、普通の図書館なら貴重書に分類されているような図書が書棚に並んでいます。これもかねて気懸かりなことのひとつですので、この機会に付け加えておきます。

それはともかく、保存図書館が仮に近畿地区の大学共同利用としてでもできれば、附属図書館の運営はずいぶん楽になるのではないのでしょうか。そのためには、多分、学内の図書利用の条件を整える必要があるでしょう。500万冊のなかには重複しているものもありましょうし、それらを整理しても不自由しないだけのシステムを実現しておかなければなりません。いまの部局図書館と中央図書館の関係は100年前に原型ができたもので、伝統として十分成熟した実績をもっています。これを生かしながら、さらに進んで、こんにちの学術の要求に適合しているかどうか、ハードとソフトの両面にわたって検討を加えるべき時期にきていると思われます。

あまり熱心ではなかつた利用者が館長業に足をつつこんで二ヶ月、まだ館長にはなりきらないサナギが寝言をいっているような文章になりました。ご批判をお待ちしています。

資料紹介

新しい CD-ROM がはいりました

静脩 Vol.27, no.2 でもお知らせ致しました様に附属図書館では CD-ROM による情報検索サービスをおこなっております。1990年当初日本語系5種、外国語系2種でスタートした CD-ROM ソフトも、現在は日本語系5種、外国語系6種に増加しております。内容は下記の通りです。

附属図書館所蔵 CD-ROM ソフト一覧

〈日本語系〉

- * AURORA on CD-ROM : 青山学院大学蔵書目録
- * CD-HIASK : 朝日新聞全文記事情報
- * 学術雑誌総合目録 CD-ROM 版
- * 国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録
- * 電子広辞苑

〈外国語系〉

- * Books in Print Plus (図書の出版情報)
- * Ulrich's Plus (逐次刊行物の出版情報)

- ① Boston Spa Conferences on CD-ROM
- ② Boston Spa Serials on CD-ROM
- ③ Bibliographie Nationale Française depuis 1975

sur CD-ROM

- ④ Deutsche Bibliographie on CD-ROM : DB-CD
aktuell : 1986 ff. Series A,B,C,H and N

上記①-④が、新たに受け入れられた CD-ROM です。①、②については British Library、③は Bibliothèque Nationale、④は Deutsche Bibliothek の編纂による目録情報が収録されています。それぞれイギリス、フランス、ドイツの国立図書館であり、例えて言えば日本における国立国会図書館の蔵書目録ということになるでしょう。

その内容について以下に簡単にご紹介致します。

① Boston Spa Conferences on CD-ROM

BL (British Library) の DSC (Document Supply Centre) 部門が所蔵する英国及び各国で開催された学会、国際会議等の会議録の書誌データ。データ件数300,000件。データ更新頻度は年4回。年間増加件数20,000件。検索項目としては、会議名、キーワード、開催日、開催地、スポンサー、会議のシリーズ名、出版者、出版地等14項目。

② Boston Spa Serials on CD-ROM

BL の DSC 部門及び英国の他の図書館 (Camb-